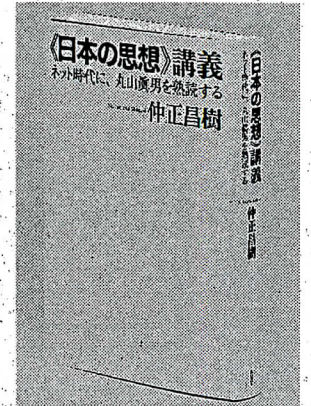


# 《日本の思想》講義

ネット時代に、丸山眞男を熟読する 仲正昌樹著

## 現代の課題浮き彫りに



(作品社・1800円)

「戦後民主主義」という言葉が強い求心力を持った時代があった。「護憲」や「平和主義」といった言説が一世を風靡し、リベラルな知識人や文化人たちが社会を先導していた。そうした時代の寵児が丸山眞男であった。

本書は丸山の主著『日本の思想』を解説しつつ、現代社会への鋭い問題提起を行なっている。講演を書籍化しているため講義形式で読みやすい。日本の思想の特異性、国体(国體)、無限責任/無責任の体系、無構造性とタコソボ型、「である」社会と「する」社会など、丸山のお馴染みの議論が分かりやすく解説されている。社会を基底する精神が欠如しそれぞれが孤立したタコソボ型社会「すること(行為)」「よりも」であること(立場)「によって秩序化される社会—これは現代のネット社会にも当てはまる示唆である。

だが、本書の真骨頂は丸山の遺作を解説することのみあるのではない。「現代思想」や「社会哲学」への深い造詣から、著者ならではの「仕掛け」が用意されている。スピノザ、ホッブス、カント、シュミットなどの西洋政治思想史、デリダやフーコーなどの現代思想の知見を駆使して、日本の国家観の特異性が強調されている。外来習俗を融合化する「無限抱擁性」において、原則は曖昧化し、合理性ではなく「場の雰囲気」によって、人間関係それ自体が価値化される。物神崇拜や公式主義の下で、無限責任と無責任とが表裏一体に構成される。戦後に限ったことではない。

他方で、著者はサンデル・フームを「サンデルってこ」と揶揄しながら、哲学的な議論の構成よりも「正しい答え」を求めようとする態度、その哲学ではなくサンデルを物神崇拜する姿勢を厳しく糾弾している。理論とは抽象化という「フィクション」なのだから、そう簡単に「正解を求めることなどできない。丸山が論難した日本社会の病理は依然として私たちの社会を蝕んでいる。その事実を自覚的になければならない。混沌を深める日本社会の課題を浮き彫りにする一冊ではないだろうか。(九州大准教授・政治学 大賀哲)

なかまさ・まさき 1963年広島生まれ。金沢大学法学類教授。著書に『〈リア充〉幻想』など。

西日本新聞 2012.11.25